

博士論文要約

**Summary of Doctoral Dissertation**

イメージ化された売茶翁

—江戸時代後期における文人表象—

Images of Baisao:

Cultural Production in Late Edo Literati Culture

国際基督教大学 大学院

比較文化研究科提出博士論文

A Dissertation Presented to  
the Division of Comparative Culture,  
the Graduate School of International Christian University,  
for the Degree of Doctor of Philosophy

古郡紗弥香

Furugori, Sayaka

2014 年 12 月 17 日

December 17, 2014

# イメージ化された売茶翁—江戸時代後期における文人表象—

## Images of Baisao: Cultural Production in Late Edo Literati Culture

比較文化研究科 博士後期課程 古郡紗弥香 (129041)

### 1、序章

本論文は、江戸後期の黄檗僧、文人である売茶翁（1675～1763 年）の表象を対象とし、彼に対するイメージの形成と変化の過程を追うものである。その特徴は、売茶翁の実像を対象とした先行研究とは異なり、表象の形成と変化という文化生産の過程を追うところにある。

売茶翁は、蓮池藩（現在の佐賀県）に生まれ、11 歳から 67 歳で還俗するまで黄檗僧であった。若い頃に厳しい修行を積み、将来が期待されていたと考えられるが、50 代で近畿に移り住み、黄檗僧や文人たちと交遊を深め、1735 年ごろには売茶翁として、名所での茶売りを始めている。名所で煎茶を売るとは以前からあったが、売茶翁はそこに中国の文人スタイルの煎茶を持ち込み、知識人による露天の茶売りは有名になった。売茶翁の茶売り行為自体、表象の記号に満ちたものだったが、その姿を世に広く伝えたのは、売茶翁没後に、多くの人々によって形成され、変化して、多様な広がりを見せた売茶翁の表象であった。1755 年に腰を悪くして茶売りをやめた後は、揮毫によって生計をたてながら、心おきない仲間たちと交流しつつ暮らした。

売茶翁の交遊関係には、文化史に名を残した人々が多く見られる。その点に注目した先行研究もある。たとえば、「売茶翁伝」を書いた大典顕常（梅莊、竺常：1719～1801 年）は、後に相国寺の住持となった人物で、徂徠学派との交流があり、朝鮮通信使対応の文書を任されるほどの学識と文才があった。売茶翁の法弟である大潮元皓（1676～1768 年）もまた詩文集を多く残した文学的素養の高い人物である。儒教にも詳しく、一時、江戸の深川に住んで、荻生徂徠や服部南郭らと交流している。彼らを始めとした黄檗の僧侶に留まらず、桑原空洞（1673～1744 年）、亀田窮楽（1690～1758 年）、宇野士新（1698～1745 年）、木村兼葭堂（1736～1802 年）、彭城百川（1697～1752 年）伊藤若冲（1716～1800 年）、池大雅（1723～1776 年）などの多彩な顔ぶれとの交遊が認められている。売茶翁は、彼らと共に、詩を詠み、煎茶を飲み、絵を描かれ、文人同士の共感に満ちた交流をした。

売茶翁の先行研究は、人物研究から始まった。それは、売茶翁個人のみを対象とした著作や、煎茶や煎茶史に関する著作の中で、売茶翁の実像を描写しようとするものだ。中でも福山朝丸氏のまとめた一次資料や谷村為海氏によって収集された資料と年譜は、後の研究の基盤となっている。1990 年ごろからは、ネットワーク研究の観点から売茶翁が高名な

知識人たちと交流をもったことが注目された。人物研究が評価した売茶翁の、人間性と生き方は、ネットワーク研究によって、売茶翁の影響力の強さと結び付けて解釈された。

上記の売茶翁や友人たちに対する先行研究の方法は、文人研究のそれに影響を受けている。総体としての文人研究は、人物の実像を把握するための、個々の文人の作品と人物の研究を基盤とし、その積み重ねによる考察から始まった。そして、人物研究の成果の蓄積によって、中村幸彦氏は、多芸性・矜持・反俗性・隠逸性・孤高性をもって日本の文人を定義し、中野三敏氏は、雅と俗の交じり合う作品を生み出した18世紀の文化生産力に光を当てている。1980年代以降になると、ネットワーク論の影響を受け、文人間の交遊を主題とする研究が行われ始める。それらの研究が、主に彼らの作品を分析対象とし、個々の文人の事跡の中に交遊の跡を探して、両者を関連付けるという方法を取ったのは、文人研究の歴史的な流れに沿ったものであった。しかし、文人の交遊に関して、伝記的事項に対する分析だけでは掘り下げが不十分だとして、Anna Beerens 氏の研究などネットワーク自体の特徴を解明することを目的とした研究も行われている。ただし、文人の人間関係や交遊内容に対する分析は、これまで蓄積されてきた文人に対する定型化した見方による制約を受けてしまう可能性も高い。また、文人文化と大衆文化の関係についてなど、人的ネットワークに注目するのでは解決しきれない問題も残されている。

本論分の主題に話を戻すと、上記のように売茶翁の伝記的事項や交遊相手とその内容については、かなり詳細に明らかにされてきた。一方で、売茶翁の表象に注目すると、興味深いのは、売茶翁の人物像が形成され変化していく中で、かえってその没後になって、イメージが巨大化し広く浸透していくことだ。しかし、これまでの研究では、売茶翁の表象の肥大化に関して、煎茶の人気の拡大による神格化という形のみでの説明に留まっていた。確かに、江戸末期には煎茶と深く結びついた売茶翁のイメージが強化されているが、17世紀後半から幕末に至るまでに、売茶翁の表象は紆余曲折をへて多彩なイメージを生み出している。

そこで、この現象を、ヒーロー論や表象論の方法論を参考にし、「文化的ヒーロー (cultural hero)」という概念を使って分析した。「文化的ヒーロー」とは、本論文の分析上の必要から設定した概念で、筆者の造語である。この語を、「所属する文化的価値体系の中で認められている何らかの価値を体現していると判断された存在」と定義する。重要なのは、「文化的ヒーロー」は、偉業を成し遂げたかどうかに関わらず、文化的な記憶の蓄積によって形成された理想的人物イメージの類型、および、その類型に当てはめて文化的ヒーローとして受容された人物である点だ。つまり、文化的ヒーローであるかどうかの分別は、受け取り手の価値観に大きく依存する。

この論文では、売茶翁の表象を伝える媒体を、テキスト・絵画と画像・物・パフォーマンス

ンスの四つに分け、それぞれの媒体ごとに特徴的な表象表現の伝統と、その売茶翁表象への適用及び創造の様子を追った。その分析の過程で見えてきたのは、売茶翁表象の形成および変化とその浸透の結果として起った売茶翁の称揚は、当時の文人たちの思想や価値観をあぶりだし、社会状況の変化を敏感に反映しているということだった。

## 2、第一章

第一章テキストでは、まず、隠逸のイメージの浸透を背景として、売茶翁や友人たちが、売茶翁の表象を形成したことを、中国と日本における先例とともに確認した。「隠逸」に対する積極的な評価は、竹林の七賢のイメージに見られるように、中国において、老荘思想への共感とともに宋代ごろに文人たちによって形成され、五山文化を通じて日本にも伝わっていた。明清代に中国では文人的な価値観に基づいた生活が広く流行し、その指南書も多く出版された。それらの版本の舶載と、黄檗宗の僧侶たち、明末の騒乱を逃れてきた人々によって、文人文化がもたらされ、儒教の推進によって広がりつつあった。

売茶翁の遺した詩偈集『売茶翁偈語』（1763年）にも、その影響が見られる。『売茶翁偈語』が伝えるのは、売茶翁のメッセージである、「禅の悟りに通じる文雅の茶」ばかりではない。『売茶翁偈語』には後の時代の売茶翁の表象の元となる自己表現がちりばめられていた。「清風」「通仙」「塵縁絶」など、隠逸の文人のイメージを伝える語、「風狂」や「漂泊」によって西行や芭蕉につながる漂泊の旅人のイメージ、陸羽や盧同に連なる正統的茶の継承者のイメージである。売茶翁の友人たちは、売茶翁が種をまいたそれらのイメージを継承し「売茶翁伝」や売茶翁との交遊を詠った詩などを遺している。

売茶翁の没後しばらく、彼のイメージは、売茶翁と友人たちの提示した表象に基づいて、黄檗僧として身につけた教養や才気を長所とする隠逸の者として伝統的価値観に基づいて描写された。しかし、文人たちを取り巻く環境はジレンマを生み出しており、文人たちは自分たちの現状にふさわしいロールモデルを求めはじめる。文人たちは大衆文化の振興とともに生きることに葛藤を抱えていたが、それは明清代の中国の文人たちが陥った状況でもあった。

明代以降の大衆化の進む時代にあって、教養は広く開示され、それを学ぶ余裕のある富裕層の出現によって、文化の場における文人の絶対的優位は揺らぎ始めていた。大衆化するメディアを利用した文人たちの盛んな自己表現は、自分の優位性を確保し、多勢に埋没しないための必死の行動の結果でもあった。しかし、文人としての理想像は、古代に固定されたままであったから、理想と現実を引き裂かれてジレンマに陥っていた。王陽明の「真情の発露」を是とする思想は、白話小説などの大衆文化の魅力を肯定するための思想的裏づけを与えた。さらに陽明学に影響を受けて展開された「童心説」は、文人に、自分たち

がすでに巻き込まれている大衆化の美点を認め、大衆文化の場に参加するための新たな価値観を与えて道を拓いた。

日本の文人たちは、「童心説」などを参考に、真情に従うことを肯定し、伴蒿蹊はそれを「畸」という価値基準として提示し、伝記集を編んだ。『近世畸人伝』（1790年）は、その構成から、身分や生業をこえた「畸人」という概念を理想とする人々として文人を設定することで、身分・生業に縛られず、文人であることのみによって所属できる新しい文人のアイデンティティを創出したといえる。伴蒿蹊は、その中で売茶翁を、思うところに従い、地位も名誉もある立場を放棄して、一介の茶売りとなった者として、「畸人」の代表とし、積極的に評価した。ここにいたって、売茶翁は新しい表象として生まれなおした。そして、伴蒿蹊による1790年の『近世畸人伝』は4回も版を重ね、売茶翁の新しい表象を広く喧伝することになった。

『近世畸人伝』と平行して、同時期の文人による列伝、随筆、日記における売茶翁への言及は、『近世畸人伝』の影響のうかがえる売茶という行為の奇矯さへの注目や、ユーモアたっぷりの茶目っ気を前面に出す場合に加えて、煎茶に関する記述の中で売茶翁が言及されることが多くなっている。また、売茶翁の遺物に博物学的興味を注ぐ者もいた。

『近世畸人伝』以前からの伝統的な価値と『近世畸人伝』によって加えられた新しい価値を得て、表象の幅を広げた売茶翁は、「煎茶（人）」や「名家」という表象のバリエーションも得ることが可能になった。煎茶と深く結びついた売茶翁の表象は、煎茶書における売茶翁の描写から始まっている。煎茶書は煎茶の喫茶趣味の普及とともに数多く出版されたが、それは中国の茶書の翻訳から始まった。茶の理論や実際の手順について、中国の茶書をもとにしてまとめられた書が最初期のもので、次に、日本で煎茶の喫茶趣味を持つにはいかにしたらいいのか、その具体的な方法が検討され、抹茶の道具の流用も含めて指南書があらわれる。その中で、売茶翁の煎茶道具は持つべき煎茶道具のモデルとして高く評価された。そして、日本でも広く文人的煎茶趣味がいきなり、炉や急須などの制作者も出てきて次第に産業化し、青製煎茶が作られ始め、道具や環境が整ってくると、当代に至る煎茶の歴史も振り返られるようになってくる。そのなかで、理論の祖としての陸羽、煎茶精神の祖としての盧同の両者を淵源としながらも、日本で煎茶の興隆の契機となった人物として、売茶翁の煎茶史における比重の置き方が大きくなっていった。つまり、「煎茶（人）」としての売茶翁表象は19世紀に入り、煎茶愛好者が増加し、煎茶書によってその歴史が創成される中で、日本の煎茶の中興として位置づけられて神格化していった、煎茶の神としての売茶翁である。

また、「名家」とは、印刷出版業の隆盛の中で、19世紀半ば以降、読者の興味の求めに応じ、知名度の高い人物に対する興味を満たすという出版側の思惑によって作り出され

た表象の類型である。そこでは、畸人や煎茶の翁として有名になった売茶翁が、有名人としての意味づけ以外を剥奪した形で提示される。たとえば、黄表紙に取り上げられた、売茶翁をモデルとする人物は、売茶翁の奇矯な行動やユーモアに焦点を当てた表象であった。一見畸人伝の路線を踏襲しているようだが、評価の基準は「風流」に戻っているところに注目したい。ほかにも、売茶翁のイメージが西行と重ね合わせて描かれることもあった。売茶翁の知名度の上昇とともに、売茶翁は世間の有名人の一人として異種百人一首にも取り上げられるようになる。そこでは、伝記と売茶翁の狂歌が採録されているが、その画像は抹茶の茶人になる場合もあり、内容よりも、有名人として異種百人一首の素材としての利用価値の方が優先されている。

テキストによる売茶翁の表象は、いくつかの段階に分けられる。その始まりは、売茶翁の自己表現を種として形成された、『売茶翁偈語』に見られる友人たちの売茶翁表象であった。それは、中国の文人文化の中で醸成された価値観を共有する人々の憧れに基づいた表象であった。第二段階は、後の世代の文人によって、『近世畸人伝』に見られるようなロールモデルとして新しい意味づけを加えられたことだ。そして、第三段階は、売茶翁に関して、逸話や話の面白さが重視されるとともに、勘違いや、創造も含めて非常に幅広く多彩な表象を生み出した。最後に、畸人としての売茶翁イメージの成立、及び名家化と同時並行的に進行していたのが、煎茶の祖としての売茶翁イメージだ。煎茶が普及していく中で、売茶翁はその中興の祖として位置づけられ、煎茶の価値を担保し、正統性を保証する存在になった。それゆえに、売茶翁の称揚が進み、茶神とまで言われるようになっていく。

これらの売茶翁像の形成と変遷には、東アジアの文化の中に織り込まれた文化的ヒーローのステレオタイプが深く関わっていた。文化的ヒーローは、一個人によって創出できるものではなく、さまざまな要因によって形成されるが、一つ言えることは、ヒーローであるかどうかの判断基準は、対象となる一個人の持つ特徴に還元されるものではなく、受容側の（受け取り方の）問題である、ということだ。だから、江戸時代の文化を考える上で、売茶翁という表象が興味深い素材となるのは、彼が、「畸人」という新しいステレオタイプの型の誕生と深く関わっていることにある。売茶翁が、新しいタイプの文化的ヒーローとして生まれ直した背景には、そのようなヒーローを求める受容層がいたということを示している。彼らは、それまで文化的ヒーローとして慕われてきた者ではなく、新しく自分たちにふさわしいヒーローを求めている。新しい受容層を生んだのは、享保以降大きく変化した文人を大量に生み出した状況の変化である。

畸と徳を合併させ、身分や教養から畸人概念を独立させるという『近世畸人伝』の革命的なアイディアがどこから来たかと考えてみれば、その源は中国の文人の置かれていた状

況までさかのぼれるだろう。つまり、大衆化によって、文人であるために必要な教養が開かれたものになるにつれ、独占的な知識人としての優位性は崩れ、平均化されてしまった。つまり、その当時までの行動や業績の価値観は、無意味になった。そのような状況の変化の中で、王陽明などの明代の新しい思想は、人間の本質はまず心にある。という新しい考え方を浸透させた。日本においても、知識・教養の大衆化が進んでおり、文人たちは新しいアイデンティティの拠り所を求めていた。伴を中心とする文人のネットワークは、売茶翁を始めとする畸人伝に収められた人物の行動の描写によって、文人の理想的生き方のモデルとして、新しく提示しようとする畸人の概念を具現化してみせ、人々に熱狂的に迎えられた。

ただし、固定的な枠組みから引き離された、「畸人」は、大衆化の流れに引きずられて、名家の一種へと変貌していく。一度は文化的ヒーローの型の一つとして、成立しながら、そして、煎茶の世界においても煎茶のヒーローとして系譜に組み込まれ、千利休と対置されるような祖としての役割を与えられながら、幕末にかけては名家アイドルのひとりとして、消費される有名人表象の一つになってしまった、売茶翁の表象の変遷の期間の短さと、触れ幅の大きさこそ、江戸時代の文化が表象の文化であったことを示している。

雅文学の確固たる基礎と共に始まった江戸時代の文化は、経済発展と出版・流通の飛躍により、大衆文化への転換期を迎えた。始めは交じり合って互いに影響を与え合い、新しい雅と俗の組み合わせによる化学反応を生み出したが、大衆文化の波は大きく、最終的にはすべてを飲み込んでしまったのである。

### 3、第二章

第二章で扱うのは、絵画と画像に表現された表象だ。人物の画像の中でも、売茶翁の表象の形成と浸透の素地になったと考えられるのは、禅の悟りの契機や禅問答の様子を描いた禅機図や漁樵を描いた文人の絵画である。漁樵は、優れた素質を持ちながら、あえて身をやつし、市井にまぎれて暮らす人々で、伝記逸話を伴う人物像の一類型である。これらの画題は、すでに五山僧の絵画や画譜類を通じてイメージとして浸透していた。

売茶翁は、池大雅や伊藤若冲を始めとして、三熊思孝や田能村竹田、谷文晁、渡辺崋山、富岡鉄斎など数々の文人によって描かれている。売茶翁を描いた像に特徴的なのは、第一に、しわが深く刻まれた顔、髪やひげのぼさぼさに伸ばし、鶴氅衣を着た風貌である。これは、売茶翁自身や友人たちによる『売茶翁偈語』における売茶翁の描写と重なる。第二に、当時の一般的な肖像画とは異なり、売茶中または売茶に関わる行為中を描いている。これらの特徴は、禅機図や漁樵図のイメージを受け継ぎ、その尊さを、売茶翁にも視覚的なイメージを通じて転写するものであった。

まず、高い教養と人格を持ちながら世に隠れ、漁樵など、一見なんでもない人のようにみえることを生業としている人物に関する故事は文人たちの憧れる人物類型の一つであり、売茶翁の売茶行為はその類型を実際に行っているという意味で、文人たちにとって非常に価値のある行為であった。そして、文人による売茶翁像は、ほとんどが売茶中の姿を描いたものであるが、売茶翁の売茶行為には、生活の糧であるという以上に、徳誠禅師(船子和尚)・至道無難禅師・慧能大鑑禅師や特に桃水雲溪などの故事にならっており、悟りに通じる茶という意味で、先例をイメージさせるものであった。それは、文人画における売茶翁の描き方が、その行為に焦点があてており、その画像に中国の画譜類の構図や人物描写が反映されていることから伺える。

また、日本には、聖徳太子像や柿本人麻呂像のように、逸話と深く関わる姿で描かれ、尊崇や祈りの対象、そして、描かれる者にあやかる効果をもたらす機能を肖像画にも足せることが行われてきた。売茶翁が茶売りの姿で描かれたことから、一般的な肖像画とは異なり、尊崇をこめて、文人の好む画題の一つになっていたことが伺える。

売茶翁は、一服一銭や煎じ物売りといった貧しい商売人と同じ茶を売る、という行為を生業にしたが、その服装やしつらは、明らかに異なる者であることを示していた。道具や服が中国的で、売茶翁に教養があることに気づけた文人たちは、さらに売茶翁の行為の中に表現された、昔から存在する文化的ヒーローに重なる様々なヒントをくみ取ることができただろう。売茶翁は、彼らにとって、市井に隠れたる賢人・隠者になった。それを支えたのが、売茶翁の活躍する18世紀中葉までに、浸透しつづいていた文化的ヒーローに関するさまざまな表象の類型であった。

ところが、後に異種百人一首や浮世絵に描かれる売茶翁像を見ると、抹茶を立てる姿や僧侶の姿で描かれており、名家となった売茶翁が、「茶」に関わる者という特徴をのこして形骸化したイメージとなっていたことが分かる。たとえば、黄表紙の画像では、僧体で、天秤棒を担いで物を売り歩く、棒手振(ぼてふり)や煎じ物売りのような格好で描かれており、文人というより、完全に市井の商売人に身をやつしている。また、異種百人一首の画像は、文人画の売茶翁から離れて、完全な中国風の風体や、抹茶の茶人になっている。売茶翁は、有名人として取り上げられるジャンルが広がるほどに、その表象は幅広く多様化していった。

中国では伝統的に、テキストと画像はお互いを強めあう関係にあったが、売茶翁の表象においてもその補完関係がみられる。売茶翁は数多くの文人によって、ぼさぼさの白髪で、鶴氅衣を着た仙人的人物像として描きつがれたが、これは、『売茶翁偈語』の自己表現や友人の描写に基づくものである。つまり、売茶翁の表象はテキストによって創出され、絵画や画像によってヴィジュアル化されることで、伝播する力を増した。



一方で、黄表紙や異種百人一首は、売茶翁のイメージを、茶に関連する人物というイメージに限って伝えた。それぞれの本の意図に沿って、また画家の自由なイメージによって自在に変化するため、固定したイメージは形成しなかったが、売茶翁の知名度を上げるとい意味で役割を果たしたといえる。その意味で、それらの売茶翁像は、名家としての売茶翁表象の画像版であったといえる。

#### 4、第三章

第三章では、物と結びついて、または物を通じて表象される売茶翁のイメージを扱った。仏舎利の例に見られるように、東アジアには古来より物自体になくなった人物と同じ重みを付与するとらえ方が存在し、それによって、物に自分の属する系譜の正統性を保障する機能が見出されてきた。

売茶翁の使った茶道具は、唐物で、友人や煎茶人によって大切に保存されてきた。売茶翁は、「仙窠焼却語」を書いて、自分の茶器が将来名物化する可能性への批判的な考えを述べているが、現状は逆に売茶翁の遺物として力を持ったことを示している。そして、茶の湯の茶器の生産において「利休好み」の確立という形で利休が果たした役割を、結果的に売茶翁も担うこととなった。それを示すのは特に19世紀半ば以降の煎茶書に載る売茶翁の茶道具の描写や挿図である。

数多く茶器を図とともに載せたのは『近世畸人伝』が早い例だが、その出版からそれ程立たぬうちに、煎茶を喫することは、文人趣味の一環として幅広く広範囲にわたって流行する。そして、さまざまな煎茶書の中で、売茶翁の茶器についての言及が行われるようになる。茶器の選び方の基準としては、多くの茶書が中国の茶書の伝統にのっとり、清潔であること、を第一に共通して掲げ、高価な名器にこだわることを戒めているが、一方で、香味な文人の銘が入った売茶翁の遺物などを図解してのせており、売茶翁の遺物が名物化していくことには頓着しないという矛盾もある。売茶翁の茶器は、煎茶愛好家の数が増加するとともに、煎茶器のスタンダードの一つとしての地位を確立し、陶器生産という経済活動のために活用されていった。

また、売茶翁の煎茶道具を保有することは、持ち主が煎茶の歴史上正統な系譜を受け継ぐことを保障し、逆にそれによって、煎茶人としての売茶翁表象の力を強める働きを持っていた。売茶翁の煎茶道具の現物は、日本で最初の家元といわれる花月菴の手にその大半が渡る。売茶翁の煎茶道具を保有することは、花月菴にとって、大きな意味を持っていたと考えられる。売茶翁の煎茶人としての表象は、売茶翁の表象の中で、尊崇の度合いが最も強く、また後世まで残った表象である。それは、煎茶に親しむ者が組織化され、強い基盤を持つことができたからだろう。

売茶翁の没後、売茶翁への敬慕の念から遺物として尊重されていた売茶翁の煎茶道具は、1800 年頃には、売茶翁が中興の祖としての地位を確立しつつあることに起因する、煎茶道具のスタンダードとしての価値を付加された。そして、売茶翁が、中興として煎茶の歴史の中に地位を確立することによって、売茶翁の煎茶道具は所有による正統性の保証機能を持つに至った。これらに共通するのは、煎茶道具に売茶翁を象徴させている点、そして、煎茶の文化的ヒーローとしての売茶翁の表象の形成に深く関わっている点である。

## 5、第四章

第四章では、パフォーマンスを扱う。文人にとって、パフォーマンスはさまざまな意味で文人としてのアイデンティティを確立するための重要な場であった。また、テキスト・絵画と画像・物という三つのメディアを通じて表現された売茶翁像はパフォーマンスを通して表現されたときにより強い力を発揮した。そのため、売茶翁がパフォーマンスを通じてどう作られ、語られ、拡散し、変化を重ねたかを知ることが、文人文化における表象の問題を考える上でも重要である。

文人のパフォーマンスの基本形は、共感に基づく交遊と集いにある。少人数の文人同士の親密な交遊の様子には、「知音」や「子猷訪戴」などの逸話がある。また、「竹林七賢」、「蘭亭修楔」、「桃李園遊」、「香山九老」、「西園雅集」などの雅集も有名である。それらの故事は、多くの文人たちによって詩に詠まれ、絵に描かれ、それは日本にも古くから伝来して、知識人たちにとってはなじみの深いものであった。さらに、これらの交遊の生きた見本として、石川丈山の詩仙堂や、渡来して宇治に黄檗山万福寺を開いた隠元とその弟子たちが存在した。黄檗僧たちは、文人的な面を多分に持っており、画賛をしたり、雪でいれる煎茶を楽しんでそれを詩に残したりしている。

売茶翁も、数は多くないが「携友遊紉」や「贈窮楽隠士」といった詩を残し、共感に基づく文人的交遊をおわせている。売茶翁と友人たちの交友の描写からは、売茶翁と友人たちが、文人らしい古典的なパフォーマンスの理想を継承し、再現していることが分かる。『売茶翁偈語』の制作と、そこに描かれる売茶翁の理想的な表象は、これらの友人たちとの交友によって支えられていた。

しかし、本来は縛りのない共感の場であった文人の集いが、次第に、目的が定まり、集う時と場が固定化し、ルールが設けられ、集いの形が日本化していった。文人趣味をもつ人口は、飛躍的に増大しており、人数を増やした文人たちは、宝暦以降、詩や煎茶、琴など好みに応じて結社を作り始めた。集いの形の変化に象徴されるのは、文人の在り方が中国の古代の文人たちとの相違である。それがより鮮明になるにつれ、文人たちはジレンマを抱えるようになる。伴蒿蹊と友人たちが、売茶翁を代表として『近世畸人伝』に見られ

る人物像を提示したのも、文人によるアイデンティティ模索の動きの一つであった。

文人の集いの形が変化する中で、煎茶を契機にした文人の集いも形式化が進む。煎茶の家元が出現し、系譜の正当性が問われる状況が生まれるのと平行して、売茶翁は煎茶の中興としての地位を確立し、系統の正統性を保障する機能を担うようになっていった。また、結社の中には煎茶に関わる結社もあり、煎茶趣味を盛り上げ、幕末のスペクタクルである青湾茶会を支える人員の準備になった。

また、文人の作品を売買する「書画会」という市場が整い始めるとともに、文人は、公開されたスペクタクルの舞台に上がることになる。これもまた、「青湾茶会」につながる流れである。江戸時代、盛り場では、開帳や相撲の興行、歌舞伎が行われ、そこに至る道は仮設の店舗でひしめいていた。また、近くには有名な料亭や菓子屋が並ぶ界限があり、文人による公開スペクタクルである書画会は、主に料亭で行われていた。内輪の集いは開かれた展覧即売会へと移行した。

煎茶を契機とする集いも、鑑賞者と演じ手が分化していく。青湾茶会は、売茶翁の表象をシンボルとして開催された大寄せの煎茶会である。売茶翁の表象は、田能村直入による100幅の売茶翁像、記念の青湾の碑と碑文、煎茶席のしつらえ『青湾茶会図録』（1863年）の刊行の際に活用された。1200人がつめかけたというこの煎茶会において、すでに、売茶翁は文化的ヒーローとして全体を纏め上げるイメージの力を獲得していたのである。

売茶翁の表象は、文人のパフォーマンスの変遷に大きく影響を受けている。江戸時代を通じて、状況に合わせて文人の集いのかたちは変化した。始めは、教養や感覚・趣味を共有する者同士の内輪のものであった集いは、日時や場所の固定された会や結社へ、そして、スペクタクルとしての展覧形式に移行していった。そして、売茶翁の表象は文人が集う場で成長した。パフォーマンスの変化とともに、売茶翁の表象も共感の対象から、イベントを統合するシンボルへとまつり上げられていった。

## 6、結論

先行研究は、対象となる人物の実像を追求してきた。それによって、明らかになった伝記的事実は数多くあり、それが現在の文人研究の基盤となっている。しかし、文人を理解しようとするとき、伝記的事実からの分析のみでは、文人の重要な面を見落としてしまうと筆者は考える。また、文人文化に対する分析は、これまで、おもに文人の語る言葉に依拠してきた。文人の描写による文人理解は、彼らの生み出したイメージを通して文人を理解することに繋がる。だが、文人は、古の文人と自分たちのイメージを重ね合わせることに喜びを見出してきた。彼らの自己表現を一文人が文人を語り、文人文化を語る言葉を一額面どおり受け取ってしまってよいものだろうか。本論分では、逆に、文人の生み出した

表象自体を分析の対象とすることで、文人の思想や価値観を知ることができると考え、文人と表象の關係に焦点を絞り、売茶翁の表象の形成と変化を通じて、文人の理想とその変化、そして現実との葛藤と対処の様子を分析した。

現在では、煎茶の売茶翁という表象に収斂したとみえる売茶翁のイメージは、江戸時代には、隠逸・漁樵・畸人・名家というさまざまな顔を持っていた。この表象の豊かさが売茶翁を文化的ヒーローとして成り立たせていた基盤である。その豊かさは、受容する者の状況と価値観に合うような文化的ヒーローとして語られ、そして、受容者に受け入れられるなかで生み出された多様性であった。つまり、個人的な性質や才能、業績の「優劣」によるのではなく、その人物が、ふさわしい表象で語られ、受け入れられたためであったといえる。